

小特集「パンデミックに思うこと」

「パンデミック」は何の予兆なのか？ —身近な「悔い改め」への舵取りのために

稲賀 繁 美

バブル崩壊後の人類慢心のつけ

右肩下がりの経済状況が三〇年以上続いてきた。社会構造そのものが大きく変質している。にもかかわらず霞が関や永田町、中央官庁や官邸周辺では、依然として経済成長を当然の前提とした施策・政策を維持してきた。原子力発電を含めたエネルギー政策や、国家予算も、特定の分野を除けば、依然として右肩上がりの設計図を変更できない。高度経済成長期のインフラが老朽化し、列島各地で更新が必要となってきた。その傍らで福祉予算を含む歳出は、人口構成の著しい少子高齢化もあって、鰻登りの上昇を見せている。慢性的赤字財政下、例外的な「特定」分野のひとつに、ほかならぬ研究教育分野がある。この二〇年ほど、運営交付金は毎年一％の割合で減少を続けてきた。この文教政策が早晚どこかで破綻を迎えることは、常識さえあれば予測できたはずだが、行政当局は責任を先送りすることで、いままで事態をやり過ぎしてきた。さらに、選挙結果の短期的な金銭的利益に執着する政治現場は、誰の目にも明らかで財政破綻の滝壺に向かう日本丸の進路変更、必要な舵取りを図ることもできぬまま、目

先の利益にかまけて、目を瞑ってきた。

そうしたなかでのパンデミック騒ぎである。経営破綻に瀕して、一日も早くかつての日常への回帰を願う声も切実だが、反対にもはや二度と昨日の世界には戻れない、という諦めもまた顕著となってきた。端的にいうと、現下の事態は、短く見積もってもここ三〇年、いますこし長いスパンなら、ここ一〇〇年ほどの人類の文明史に、地球環境という名の自然が突き付けた、切実なる忠告ではなかったか。東日本大震災を「文明災」と捉えた梅原猛ならば、ここにより深刻なる第二幕を見たに違いない。事態は、およそ自然の猛威に対していかに人類の知恵がこれを克服・制圧するか、といった旧来の図式や人間優位の価値観では収拾できない。もとよりこの予測に「学術的な論証」など試みる用意はないが、人類の慢心と過剰なる傲慢さへの警鐘にも気づかない鈍感さが、未曾有の試練に直面している。

警鐘としての、恒常的な世界的感染蔓延

地球生態圏の表層を覆う移動手段の発達と、物資流通・金融経済の世界的な相互依存、さらには情報網に顕著な全球化の亢進。それがなにもたらすかの端的な提喻が自然界から齎された。このところ、ほぼ八年周期で人類を襲う、様々なウィルスの世界的蔓延は、人類が成し遂げた「進化」の陰画あるいは因果に他なるまい。にもかかわらずそうした世界的感染を撲滅しようとする姿勢は、端的にいうと、自然が我々に突き付けている貴重な教訓を、読み間違えている。あなたたちが目指している世界、実現しようとしている現実はこれなのですよ、と新型コロナウイルスが告げている。それなのに、その現実から目を背け、その事実に見て見ぬふりを決め込むという逃避行動が、「もとの生活の回復」という願望に他なるまい。今後恒

常に、しかしその都度、予期不能なかたちで繰り返し襲ってくるものが、確実な危機の、いったって柔和な予行演習の機会を与えられながら、それに気づかない愚昧を犯すならば、これは現世人類が後世に対して犯す致命的犯罪となろう。

いうまでもあるまい。こうした世界的感染の条件を怠りなく整え、やや大げさに言えば種の絶滅の危機までをも準備したのは、ほかならぬ人類自身の知性にほかならない。水の惑星の表層をオブラートにも劣る脆弱な薄膜で覆っているに過ぎない生態系、海洋と大気を主成分とする循環系によって生存を保証されながら、その微妙な動的平衡を、一世紀足らずの短期で限界まで追い詰めるに至った人類。Homo sapiens は、大気汚染、核物質拡散さらには合成樹脂素材などの汚物の垂れ流しによって、地球誌において「人新世」という薄っぺらな地層年代を形成したのも束の間、いまや着実にその絶滅への過程を辿っている。謂うところの pandemic は、その野放図な「文明化の過程」の、偶発的な副作用などではなく、むしろ「本質」を、その下手人に対して容赦なく突きつける「凶星」ではなかったか。

人類文明史の折り返し点

政府諮問の専門家会議が、「新型ウィルスとともに生きるあらたな世界」を提起したことは、一定の見識を認めてよいだろう。健全への回帰は、もはや昨日の虚栄に戻ることはありえない。地球生態系の限界を見据え、可能な退路、失業が生活破綻を招かない社会を制度設計できるか否か。そこに、二一世紀中葉までの人類の残存にむけた企ての成否が掛かっている。これは誇張ではない。苟も「人間文化研究機構」を名乗る学術法人、「国際日本文化研究センター」を自負する機関であるなら、学術刷新の視野に立ち、社会構造の再編成・組み立て直し

に向けて、聊かなりとも有効な人文知の指針を示し、もとより微力ながら、できる範囲の社会貢献を果たすことが、設立の使命への忠誠の証とはいえまいか。

事は、国家予算の組み換え、製造業の利潤拡大路線の廃棄、架空金融資本の暴走是正、観光飲食産業の回生、失業対策事業や福祉・医療体制の再設定など、社会万端に及ぶだろう。もはやいままでの社会常識は通用しない。三・一一の折同様、危機こそが好機を孕む。だが変革への契機は早急に失われる。惰性の日常への復帰は、状況をさらに悪化させる。もとより大言壮語の誇大妄想は、本意ではない。塊より始めよとの言葉に忠実でありたい。

*

①まず大型予算を獲得しての壮大なプロジェクト型打ち上げ花火は、もはや時代錯誤だろう。右肩上がりの発想の残滓だからだ。むしろ商業的な利潤とも無縁で、国家の財政援助の増額も期待できない低資産・低消費の下で、いかなる研究が裨益するのかの問い直しが不可欠となるだろう。航空機産業の莫大な浪費に利する国際的招聘や旅費負担は、今後もはや期待できない。電子通信網により、対面会議に代替する試みが、この間急速に進展した。行政の要請による煩瑣な委員会乱立も、緊急事態に際して最小限に抑える技法が急遽模索され始めた。あらたな国際的研究への日常の基礎を、そこに据え直すことが期待されよう。

②だが次に、ここで活用される電子通信網そのものが情報 pandemic を惹き起こしている事実も、看過できまい。悪性ウィルスが現在演じている生物学的な危機は、実際にはすでに電子情報の配信網において先行して慢性化しており、それは日常茶飯なサイバー攻撃などにより、仮想現実 virtual reality の真実を穿ち、猖獗を極めていく。ネット中毒という蜘蛛の巣に囚われた現代人は、無限の情報への access を得られるとの幻想と裏腹に、無明の窒息を日々経験

し、知的な人工呼吸器に縛り付けられている。電子機器の主人たるどころか、日常の業務の大半は、反対に電子機器の従僕となる隷属状態へと劣化を遂げている。

③となれば、電子機器や人工頭脳には任せられない領域の再評価と復権とが急務となろう。それは安易な神秘主義と結託した「東洋の復権」などとは無縁だが、しかし西欧近代の価値観が抑圧し、その視点からは、いわば座標軸上で直交しているために、認識のうえで盲点となり、数値計測から脱落してきた *hidden dimension* への探求に誘う。それは妄想ではなく、むしろ昨今の脳科学が垣間見始めた未知の領界に結び付く。仏教も含む身心修行には、この次元への豊かな経験が蓄積されている。だが従来の科学は、ともすればこの身心内奥に潜む次元を「論証不可能」を口実に、意図的に回避し、端から見下してきた。

④こうした視点は、学術や教育の再定義とも無縁でない。一方で電子機器による記憶の代替や *big data* 解析技術の進歩は、従来の教育で必須とされてきた頭脳による知識蓄積の意義を、根底から覆す。膨大な暗記を要求する現在の入試制度が、もはや時代錯誤な過去の遺物であることは、明白だろう。三〇歳までの年月を費やして体得した筈の学術技能も、明後日にはもはや不要で無益な残骸へと変貌を遂げる。となれば次の世代に贈与すべき知とは何なのか、今や、知の授受と教育の常識を原点から問い直すことが急務となっている。

⑤それは、産業界の需要を見越し、社会の要請に応ずる *computer literacy* の涵養、といった、近視眼的な目標とは、もとより次元を異にする。周囲が期待するところに忠実に、出来合いの模範解答に飛びつく如才なさか「秀才」の定義であるならば、今後期待される知の哲学は、そうした「秀才」像を裏切るだろう。それは従来の試験制度による学力評価の基礎を、社会的に無効として葬り去るだけの、抜本的変革への着手を、要求するだろう。

⑥科学技術の革新を牽引してきた価値観そのものの屋台骨が揺らいでいる。となればそうした技術革新に頼り、それを肯定する学術それ自体の有効性も、もはやそのまま認めるわけにはゆくまい。自然を技術によって征服するという人間存在の生態学的限界が、未知の疫病の世界的蔓延や、気候変動ほかの要因によって、白日の下に晒されている。人類がおめおめと滝壺へと呑み込まれないためには、発想の転換によって舵の向きを転じるほかあるまい。人類はおそらくは創造主によって、短命な指標化石に終わることを運命づけて設計された被造物だろう。なお五〇億年程度の寿命は見込まれる惑星・地球に人類後に出現するだろう知性に対して、恥じることなき屍と遺蹟とを残すことこそが、人類の果たすべき義務でもあろう。大袈裟でなく、人類の歴史は、今その準備の時を迎えている。

*本稿は、筆者が本年度より研究代表者として実施する予定の最後の共同研究会「蜘蛛の巢上の無明・電子情報網生態系下の身心知の将来」にむけた準備的素描の一部をなす。

二〇二〇年五月一五日記

(国際日本文化研究センター教授)